

## 教育論議における「悲観主義」と「楽観主義」

西 穰司

周知のとおり、教育改革論議が現在盛んである。学校教育と深くかかわる青少年をめぐる深刻な問題や事件が後を絶たず、さらにわが国の政治・経済状況がたいへん困難な現状にあるだけに、教育改革論議が多方面でしかも熱烈に展開されること自体は、大いに喜ぶべきことかもしれない。しかし筆者は、これらのわが国の教育改革論議の全般的傾向として、「悲観主義」の特徴があるように思われてならない。もちろん、青少年の学校生活絡みのいじめが自殺につながっていたり、学校の教師が生徒の暴発的行為によって殺傷されるなどの事態に対して、「悲観主義」的論議が展開されざるを得ないことは、筆者も理解できなくはない。

それでも、筆者はわが国の教育論議がこれまでも「悲観主義」の色彩が概して濃いように思われるのは、一種の「教育＝神聖なもの」とする価値観や、一定の方策や修正を施せば事態を好転できるとするような短兵急な思考様式が暗黙裡に受容されてきたからではないかと考える。換言すれば、教育事象に関する「割り切り主義」が、われわれ日本人の共通した思考や行動の様式に染みついているように思われるのである。

近代学校制度が、社会全体の産業主義の台頭と並行して成立・発展してきたこと、さらに今日の情報化・国際化の進展に象徴される大規模な社会変化の過程に学校教育がうむを言わせずがちりと組み込まれていることの2点の要因を挙げるだけでも、わが国の表向きの「悲観主義」的教育論議はその実質である「割り切り主義」ゆえに有効性がきわめて乏しいと言わざるをえないのである。ましてや、教育経営事象は、人（man）・物（material）・金（money）を基本要素として、それらを適切に組み合わせて取り運ぶこと（＝経営，management）を意味する現象であるから、もともと単純な「割り切り主義」の思考では読み解けない社会現象とみるべきであると考ええる。

したがって筆者は、今日教育改革論議において、局所的現象に目を奪われたり、暗黙裡の「割り切り主義」の見方に陥ることなく、もっとゆったりとした眼で、冷静に事態をとらえようとする「楽観主義」の思考を推奨したい。もともと、教育問題は簡単に「片づけ」たり、「処理」し得る性質の問題ではないし、さらに教育担当者の主観における熱心さや誠実さは被教育者にとって時に「押しつけ」や「お節介」になり得る可能性が高いからである。肩の力を抜いて、しかし心を込めてじっくりと、これからの教育の方向を探し求めてはどうであろうか。